

には伊勢湾台風とよばれた一五号の影響で、再び大きな被害を蒙ったのでした。私たち議員は、地域の方々や市職員らと共に昼夜を分かたずこの災害復旧に努力したところでありましたが、これは私が議員となって初めて取り組んだ大きな仕事でした。

さて、昭和六十三年一月一日の甲府市の総人口は二十万四四四人ですが、三十四年当時は十七万四二三人でこの三十年近くの間には二万六二二人の増加となっています。また世帯数は現在の七万八九四世帯が当時は四万三五七世帯にすぎず三万五三七世帯もの増加となっており、一世帯当たりの構成員も三十四年四・三人が現在では二・八人とかなり顕著な核家族化の進行がみられます。一方、この期間の推移を市の一般会計当初予算の比較で見ますと、六十三年度四七四億三〇三四万六千円が三十四年度は八億四二六三万二千元で、物価の上昇などの関連もありますが約五・六・三倍、歳入のうち市税は、六十三年度二八四億七〇〇〇万円が三十四年度四億七一一四万一千円で約六〇・四倍となっており、これからみてもこの甲府市がいかに発展してきたかがうかがえるところです。

私のこれまでの任期中、市長は四代にわたりますがそれぞれの市長は、その時代に応じて最大限の努力を傾注し甲府市の発展に尽されました。それぞれの時代、特に印象に強いのは、鷹野啓次郎市長は、三〇万工業都市を標榜し公共下水道事業に着手するとともに行政の経営化をめざした市独自の行政改革に取り組まれたこと、また雄途半ばにして惜しくも急逝した秋山清市長は、都市基盤の整備に熱意を示し生活関連道路舗装など道路行政を積極的に推進され、河口親賀市長は、六十五歳以上老人医療費の負担軽減に勇断をもって踏み切るなど福祉対策に意を注がれたことなどです。また、現在の原忠三市長は、国体の成功をはじめ、甲府駅の近代化や駅周辺の整備など、とり

わけ都市の活性化に意を注いでいることを挙げることができます。

今、これまでの市政のあゆみを振り返って現状をみると、新たな時代に向っての変革の時期にあることを感じます。二十一世紀を展望した甲府市の重要課題としては、市制百周年記念事業の推進・北部山岳地域の振興・新都市拠点整備事業や南部工業団地建設事業の推進、さらにはリニア中央新幹線や中部横断自動車道の早期実現などがありますが、市制百周年をステップとして、明日の甲府のまちづくりをしようという市民の力強いいぶきを感じ、心を新たにしているこのごろです。

(市史編さん委員)

天気予報と警察電話

三井 利恵子

私は、昔の新聞を見るのが好きです。歴史の教科書にはでていない、昔の人々の暮らしぶり、価値観などが生き生きと伝わって

き、それが、現在とは随分掛け離れていることに快い驚きを感じます。ほんの一〇〇年くらいしか時間を遡らない、また、見も

知らぬ異国の話でもないのに。

仕事で明治時代の新聞を調べていた時、一つの記事に目が止まりました。それは次の様なものでした。

県下交通機関の不備なる為従来甲府測候所の気象報告上不便少からざりしが本年は甲府以東に於ける警察電話開通されたることゆへ出来得べくんば同電話を使用して各警察署郡役所等にて日々揭示するやうになし同報告の最も必要な養蚕時期即ち来る五月中旬頃より実施せんとの計画ありと云ふ（明治三十八年三月十六日付）

「警察署で気象報告を揭示する」——私はとても不思議な感じを覚えました。それで、後日談が載ってはいないかと、探してみました。四月二十七日付の新聞に「甲府測候所より降霜の警報を受けしより郡役所警察署等は各村に出張し村長其他と協力して夫々予防を督励し伝々」という記事がありました。当時の主要産業である養蚕にとつて、霜による被害は宿命的で、致命傷ともなりかねないものだったらしく毎日のように被害報告などの記事が掲載されていた。けれども「警察」という文字が見られ

るのは、この記事だけでした。しかも「気象報告の揭示」ということには少しも触れていません。

甲府に初めて一般用の電話がついたのは、明治三十八年三月一日のことでした。甲府郵便電話局内に通話所が設けられ、八王子・東京など一二の地域と通話が可能になりました。けれども電話はこの一台だけで、もとより県内の人との通話は不可能でした。警察電話は、と言えば、これに先立つ明治三十七年に架設が始められました。明治三十九年十月に、県庁・市役所などを含めた一五〇口の特設電話が市内に架設されるまで、警察は他に一歩先んじていたのです。この様な状況においては、この文明の利器が、一刻を争う霜の予防策に用いられるというのは、非常に合理的なことだと思われますし、また、現実それが行われたとすれば、警察というものが、当時人々の日々の暮しに現在よりずっと接近していたということになるのではないのでしょうか。私は、気象報告を発する側と受ける側、測候所と警察の両面から、このことを自分なりに調べてみました。以下にその結果をまとめます。

測候所について

甲府測候所は明治二十七年八月に開所したが、すぐに独自の予報を出した訳ではなかった。地方の測候所は初め、中央気象台の発表する各気象区の天気予報を取り次ぐだけであった。明治二十一年八月、地理局長から、地方においても天気予報を発表しなければならぬ旨の文書が出されたが、なかなか実現されず、明治二十五年末において予報を出していたのは、わずか九か所にすぎなかった。そして甲府測候所に関しては開始日は「（?）」となっている。

新聞を調べてみたところ、測候所が開設される以前に既に天気予報が掲載されていた。「天気予報、自昨日午後六時至本日同時、第四区（乃ち山梨、南又たは東の風雨）」（明治二十七年五月十六日付）

明らかに全国の中の一地区の予報である。そして明治二十八年四月十一日、予報が全国と地方の二本立てに変わった。中央気象台発表の全国天気予報のあとに「甲府地方天気予報、北の風晴れ後ち曇る（予報者宮下謙五郎）」となっている（宮下氏は明治二十七年七月三十一日、甲府測候所助手に

申付けられている)。これが、甲府測候所が独自で予報を出した最初ではないかと思われる。

霜の予報に関しては、同じ年の四月十三日に「甲府測候所東原技手は降霜予知管内雨量観測雨量計の構造等調査の爲め中央氣象台へ出張中の所一昨日帰県せり」との記事が見られ、続いて「四月十四日午後七時甲府測候所は（降霜あるべし）」との警報を發した」となっている。

天気予報と降霜予報は時を同じくして始められたようである。この降霜警報の傳達方法はというと、残念ながら資料は見あたらず、ただ新聞から降霜のおそれのある時は、測候所が県庁その他の役所へ打電通報し、それを受け愛宕山頂などで号砲を發射し、また釣鐘・半鐘などを打ちならして、情報を伝えていたことがわかるだけである。

警察について

当時、甲府警察署管内には、場所等はつきりしないが七つの駐在所と数か所の派出所があったようである。明治二十二年に出された巡查注意報告心得の中で、巡查が注意すべき事項の一つに「農蚕業ノ豊凶乃

殖産上ノ盛衰ニ関スル事」が挙げられている。これによると、警察官が養蚕について注意を払い、農民の利便を図ることは、任務の一つということになる。

警察電話についてであるが、明治三十六年県警察部警務課に電話主任及び工夫三名を置き設置作業を始め、明治三十七年着工した。この年に完成したのは、県庁―猿橋署―上野原署、県庁―谷村署―吉田署、県庁―石和署―日下部署の三線であった。本市に關していえば、この翌年県庁―甲府署、甲府署―停車場巡查派出所の二線が架設された。

現在とは違い、電話線が通ることは村の文化発展であるとして、地元村落はきわめて協力的で、電話も地元有志の寄付による

ものが多く、用地もほとんど無償で提供をうけたという。地元の人達の喜び・期待が伝わってくるが、そこから先の資料は得られなかった。

以上、私の調べたこと、感想などを述べさせていただきました。結局、私が当初興味を持ったことについて、確証できる資料を得ることはできませんでした。けれども、一つの事柄には、その基になる様々な事柄があり、見ることでできる頂上は狭くても裾野は広く続いているのだということを実感し、歴史の奥の深さ、楽しさを改めて感じることができました。

（市職員―投稿―）

食糧増産の鬼瓦

樋口 光 治

私の家に残る鬼瓦は戦時下食糧増産運動の際、野口二郎市長が市内農家の増産努力に報いる感謝の印として二〇軒足らずの篤

農家に配ったものの一つである。この春「山梨日日新聞」紙上で鬼瓦の所持者探しを呼びかけたところ、一四名の方々から所